後藤新平「学俗接近」論と軽井沢夏期大学の実践

——新渡戸稲造のかかわりを中心にして——

中島　純

はじめに

後藤新平については、これまでの社会教育史研究において、彼がかかわった社会教育事業の一部が断片的に紹介されることはあっても、個別の研究主題として取り上げられることはなく、さほど重視されてこなかった人物である。

後藤新平（1857－1929）は、陸中国胆沢郡塩釜村（現在の岩手県水沢市）出身で、その社会的出自は医師である。後藤は公衆衛生行政を専門とする技術官僚として内務省入りし、並外れた才覚で出世し、1892年、衛生局長のポストに登りつめる。日清戦争後、第4代台湾総督児玉源太郎にその行政才腕を見いだされ、台湾総督府民政局長・長官（1898）に起用される。日露戦争ののちに初代満鉄総裁（1906.11～08.7）となり、台湾・満鉄付属地での治績を評価され、国内政治の表舞台に登場していった人物である。「科学的政治家」（信夫清三郎）と評されるように[1]、公衆衛生、社会政策、植民地経営等の幅広い領野で、科学的調査主義に貫かれた国家プロジェクトを数々試みたことから、こんにちなおその事績が多方面から評価されている。

他方で後藤は、教育家としての発言や著作も多く、またその生涯にさまざまな教育事業を手がけてきた。「教育家」後藤の思想と行動は、台湾総督府、満鉄での植民地行政官時代においても見て取れるが、国内政界に復帰してから、とくに大正デモクラシー期に顕著になる。

その例が、戦前・戦中・戦後を通して間断なく続いている大学拡張事業、信濃木崎夏期大学（1917開講）であり、東京市長時代（1920.12～23.4）に新設された社会教育課で行われた市民教育事業である。これらはいずれも成人を対象に、後藤が持論とする「学俗接近」を具体化する形で実施された社会教育事業であり、ともに戦前のわが国の社会教育に先鞭をつける歴史的意義をもつものであった。

日本の社会教育は、「いわゆる大正デモクラシー期にはじめてその現代的な姿を浮き彫りにするようになった」といわれるが[2]、後藤新平は、まさにその時代にあって各種の社会教育事業を手がけることで、日本の社会教育に現代的な性格を刻印した役割を果たしたというのが、筆者がこれまでに一連の論考において示してきた評価である[3]。

後藤の刻印した「現代的性格」については、すでに別稿で論じており、ここではあえて

多言を弄しない。後藤は、第一次大戦後の独占資本の成立にともなう、人口の賃労働者化により社会的比重を増した都市勤労大衆、および新しく市民的階層として台頭してきた新中間層の動静をにらみながら、公民教育を内容とする社会教育を重視した。そして国民生活上の市民的諸権利を構成する普通選挙・社会政策・大学拡張といった政治・経済・文化的価値を国民に配分しつつ、啓蒙、教化事業を試みることで、国民の政治的統合を果たそうとした。このことが、大衆向けメディアの積極的利用に象徴される社会教育の方法的革新と結びつき、戦前の社会教育に現代的性格を付与するものとなった。すなわち、後藤はわが国の大衆社会的状況に即応した利益誘導による国民統合を、社会教育を方法として実践したのである。

本稿は、後藤の大学拡張についての思想と行動に照準し、彼の「学俗接近」の主張が、いかなる社会的文脈において提起され、またそれが大正デモクラシー期の社会的、文化的動向と応じあいながら、どのような形で実践されていったのかを明らかにすることを意図している。さらには、後藤新平の国益を本位とする政治的発想が、いかにして新中間層を中心とする国民大衆の利害に近づくことができたのか。この点を、後藤の言説に即して確認するとともに、彼が立ち上げた通俗大学会の組織と、夏期大学事業の実際に照らして論じていくことにする。思想は物質的関係を獲得することでその本質を表象する、などというつもりはないが、筆者は後藤自身の言説とあわせて、彼のとった行動にも着目したい。後藤は、理論家というよりは、事業家としての資質を多分に有しており、後藤の社会教育思想と実践について、その核心と振り幅をとらえるには、こうしたアプローチが有効であると考えられるからである。

その際に、通俗大学会の活動で、信濃木崎夏期大学とともにもっとも成功したケースといえる軽井沢夏期大学の実践を取り上げる。従来の社会教育史研究においては、戦前わが国の大学拡張の試みとしては、民衆の自己教育運動の歴史的遺産として自由大学運動に関心が向けられ、顕彰的視点から研究の蓄積がなされてきたのに対し、後藤の創始した通俗大学会による夏期大学事業については、個別の主題として取り上げられることは少なく、たとえば一部の通史的研究書などにおいて部分的言及は見られるものの、後藤の人物論に及んでの考察はなされず、またその評価も定まっていなかった[4]。

信州の地に誕生した木崎と軽井沢の二つの夏期大学は、「大学」の名を冠したわが国で最初の社会教育事業として歴史にその名を刻むことになるが、前者がさまざまな経緯から、通俗大学会とは独立した組織である財団法人信濃通俗大学会に運営が委ねられ、長野県行政機関および地方教育会に支えられながら事業がなされていった事情からすると、後藤新平の影響については、ある程度、限定的にとらえられなければならない。通俗大学会単独の事業ということからして、軽井沢夏期大学のほうが、本稿の主題からして対象として適切と考えられるからである。

ただし、以下の考察においては、後藤とともに通俗大学会の実践に中心人物としてかかわっていった新渡戸稲造（1862－1933）の役割を重視する。後述するように、後藤が通俗大学会による大学拡張事業を具体的に推し進めていくうえで、新渡戸稲造はなくてはならない存在であった。ことに、夏期大学の具体的な教育内容と方法にかかわる才智、識見は、当代一流の文化人であり、教育者であった新渡戸に負うところがきわめて大きかった。後藤の創始した通俗大学会に、実を与えたのが新渡戸であった。

後藤は新渡戸に何を期待したのか、また「学俗接近」の実践における新渡戸の関与が、どのような可能性と方向性を示していくことになったのか、この点も、筆者の関心事としてある。後藤のひとづかいのうまさは、彼の政治的手腕のひとつであり、その才腕は、通俗大学会の事業においても発揮されたと見られるからである。新渡戸なくしては、「学俗接近」の思想は具象化することはなかったし、夏期大学の実践もありえなかったというのが、筆者の見方である。後藤－新渡戸ラインの人脈が、夏期大学の実践において与えた影響について紙幅を割いて論じたのは、そうした理由による。

1．「学俗接近」論の提唱

（1）社会教育会への期待

管見の限りでは、後藤新平の「学俗接近」の主張をまとめた論考としては、1907（明治40）年3月発行の『新時代』誌に掲載された「学俗の調和－社会教育会の為に」[5]と題するものが最初である。『新時代』は、1906（明治39）年5月、教育家であり政治家であった蔵原惟郭（1861-1949）が中心になって創設した社会教育会の機関誌である[6]。この社会教育会は、おもに雑誌の発行と講演会活動を通して国民の知的、道徳的、精神的啓蒙を図ろうとする有志による結社で、名誉会頭を大隈重信が務め、幹部および顧問には蔵原とつながりのあった人物が名をつらねた。その顔ぶれを見ると、蔵原の属する憲政本党系の政治家として尾崎行雄、犬養毅らがおり、蔵原と同郷の熊本関係者では元良勇次郎、清浦圭吾、横井時雄らが、大学・教育関係者では大隈をはじめ高田早苗、浮田和民、安部磯雄ら早稲田系、鎌田栄吉、林毅陸ら慶応系、さらに女子教育関係で鳩山春子、山脇房子、三輪田元道、下田歌子らがいた[7]。後藤は幹部の職にあったが、彼も含めてそこに名のある者の多くは、組織に重みを添えるだけの役割にすぎず、実際に運営上の仕事にかかわる者は少なかったと考えられる。

後藤はそこで、日本国民を将来の世界における大国民とするには、政治上の革新、経済上の発展、「富国強兵」だけでは不十分である、と説く。その点、社会教育会が主張する「大学拡張」「大学殖民」のごとき、またその主義に基づいて現に実行しつつある「講演会」「演説会」のごときは、かねてから自分が主張するところの「学俗の調和」という意見と、

言い方こそ違うもののその意とするところは一つであるとし、次のように述べる。

すなわち、「現代の学者の多くは、其学問を独占し、独り天下共通の真理を楽しんで、毫も社会と共に之を楽み、社会と共に其の利益を分配する意なきものに似たり。是れ実に社会の一大欠陥にして、国家の不利是より甚だしきはなし。故に学者をして成るべく社会に接近せしめ、学者と世俗の隔壁を排除し、明治聖代の大欠陥を充塞し、以て国家の進運を阻害せざらしめんとするは、実に余が多年の間主張して止まざる所なりき」と。そして「今や茲に、社会教育会の興起するありて、余が年来の持説と、正に符節を合するが如きあるを見る。余が喜び之に過ぐるものあらむや」と述べ、同会が後藤の年来の意を得たものであると称賛している。

社会教育会はその主義に、「一、人道の大義を鼓吹して文明の精華を発揮して宇内の平和を確立する事」「一、世界的国民の気象を養成し開国進取の国是を拡充する事」「一、社会共同の精神を涵養し立憲的国民の理想を実現する事」[8]を掲げ、当時としては進歩的な社会改良の立場に拠る啓蒙団体であったが、後藤は蔵原の説くその方法論に関心を向けた。蔵原は、後藤の所論が掲載された『新時代』誌の前号（1907年２月）に発表した「社会教育の諸機関」[9]と題する論考において、「学校教育は社会の大機関なり」とし、「西洋各国に於ては社会教育の普及を図らんが為に、種々の設備を為せるものなり。社会、経済、学術、宗教、文芸、美術の各方面より、社会の向上発展を計らんと欲す。彼の英国倫敦に於けるトインビー館の如き是なり。彼のユニヴァーシチー、エキステンション(大学拡張)の如き、ユニヴァーシチー、セッツルメント（大学殖民）の如き即ち是なり」と説く。その上で、「大学の教授も学生も、共に社会に出でて或は通俗的の講演を為し、貧民の間に入りて或は之か救済の任に当らんとす。其の社会に及ぼす勢力感化は実に偉大なるものあり」と社会政策的見地から19世紀末の英国において展開していった大学拡張運動、およびそこから派生したセツルメントの社会的貢献を評価する。「社会教育」なる語が今日的な意味に近づくまで成熟し、行政用語として流通するのは大正期以降であり、この時期にあっては社会政策の教化的側面を指すものとして用いられる状況にあった。蔵原の起こした社会教育会も、理想とする社会像はともかくとして、階級融和に向けた社会改良、風俗改善を企図していたことがわかる。

さらに蔵原は、ひるがえってわが国の大学を見るに、「其の社会に及ぼす感化は、各大学が養成せる学生を通して間接に与ふる所のものに過ぎず。而かも其の感化は寧ろ悪風醜俗を社会に伝染するの、社会を善導美化することに勝されりとの批評なきに非ず」と苦言を呈する。それでも、「事実に於て、人格を養成するの力なく、単に学術技芸を教授するより外には何等の能力なき大学に向つて、社会教育の為に尽力すべきを期するは、猶ほ木に縁りて魚を求むるが如きの類なりと雖も、大学は社会教育の最高機関なり」とし、「社会の地位を高からしめんが為に、青年学生を教育するは大学の最高目的にあらずや」と述

べて、「大学の教授も学生も、学業の余暇には出て社会教育事業の為につくす所あるべし。貧民窟に入りては、之が生活状態を改良せんことに力むべし」と説く。そしてこのような大学の社会的事業に、「其の資を投じて、之を助く」のが、「金満家」であり、「富豪」である。このように蔵原は、大学と富豪が「相協力して社会を改良上進せしむるの任に当」るべく「社会の輿論を啓発して、以て社会教育の汪盛を希図」し、社会教育会を組織したと述べる。

わが国のセツルメント事業は、1897年、キリスト教社会主義者の片山潜によって東京神田のキングスレー館で取り組まれたものを嚆矢とする。そこで「大学普及講演」と称する大学拡張活動も実践されたが、片山の思想的変節もあり長くは続かなかった。社会教育会に大隈や鎌田をはじめとする私学関係者およびキングスレー館でみずからセツラーとしての経験を有する安部の名があるのは、この蔵原の目論見とかかわりがあると見てよい。

後藤は、先の論考で「学俗の調和」を図るのに、蔵原が説くところの「大学拡張」「大学殖民」は「其の方法の最も可なるものあらん」と述べる。だが、これまで東京または各地方で開催されてきた「通俗学術講談会」が、ようやく盛大になったのは喜ばしいものの、消長が激しく一つも持続するものがないこと。講談者の選定する題目があまりにも聴講者を顧みない迂遠なもので専門の学者でなければ十分な理解を得られにくいこと。さらにその説明も専門の術語、俗耳に入りがたい漢語を用い、あまりに高尚に失する傾向にあることを問題としている[10]。そしてもし、社会教育会をはじめとするこの種の事業がそうした欠陥を克服し、「学者と俗人の調和」をなし、「今日の学者を俗間に入らしめ、而して何れが俗人なるかを、見分け兼ねるに至らしめんか、学者の功徳は人生日常のことに及び、国民の品格高尚茲に一変し、社会の良風美俗此に完成するを見るに至らん」と主張する。

こうした後藤の期待をよそに、社会教育会の活動は、1907年の前半ぐらいまでのわずか一年程度にとどまったとされる[11]。その内容も単発的な演説会と講演会であり、およそ「大学拡張」とはほど遠いものであった。活動資金不足がその理由であったようだが、学生のための家庭寄宿舎の設立、演説・講演・夜学・社交の会場兼社会教育会本部たる公会堂の建設、簡易なる平民図書館、貧民幼稚園の開設といった所期の計画はいずれも実現を見ぬまま頓挫した。1907年5月、満鉄初代総裁に就任した後藤は大連におもむいており、蔵原を実質的にささえることは困難であった。「学俗接近」の実践は、植民地経営の任を終えて帰国した後藤自身の手に託されることになる。

(2) 海外膨張主義と「文装的武備」

満鉄付属地での植民地経営の経験をふまえ、後藤が国内政治に向き合おうとした際に、経略の方針として掲げたのが「文装的武備」であった。「文装的武備」とは、狭義には、「文事的施設を以て他の侵略に備へ、一旦緩急あれば武断的行動を助くるの便を併せて講

じ置く事」[12]と有事における文化的社会的施設の軍事的利用というような意で用いられるが、広義には、「王道の旗を以て覇術を行ふ」こと、すなわち、文明の威容でもって植民地における現地民の人心を収攬し、服属を図ろうとするものであった。後藤は、学校、病院といった近代文明施設をして日本人の移住願望をかきたてるとともに、現地住民をして文明の恩恵に浴せしめることが、「満洲」経営を安定させることになるとの考えをもち、またそれを実践した。こうした経験から後藤は、第一次世界大戦をきっかけに、日本が欧米列強と伍していくには、経済的方面のみならず、教育、衛生、学術の各方面における社会資本の拡充を促進すべきと主張するようになる。第一次大戦後の国家経略についての思考は、1916年に通俗大学文庫の第3巻として刊行された『日本膨脹論』のなかで開陳されている。

そこで後藤は、第一次大戦の本質を、「種族社会」から「国民国家」へと発展をとげる人類史の過度期において、「人間生命の活火が虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の妥協を破壊せんとして爆発したもの」[13]とみなした。そしてそれは「無限膨張、無限発展、無限征服、無限同化」を遂げんとする「民族の生命欲」[14]につき動かされてのものであった。後藤にすれば、「今日外観上、世界主義と見えるものも、その実、民族的精神に過ぎない」のであり、またその「民族的精神は優秀なる民族ほど強烈であって、反対に亡国の民族ほど容易に純正世界主義の帰依者または負担者たり得る」[15]のだという。このように後藤は、社会ダーウィン主義の立場から、民族間、国家間においても適者生存、優勝劣敗の法則がつらぬかれることを強調する。

後藤が、第一次大戦後の日本の対外的指標を「膨張主義」と掲げたとき、内政面で取り組まねばならない課題があった。一つが、国民におけるナショナリズムの喚起である。後藤は、日本の民族的精神のよりどころとなるのは、「天皇の直系たる皇室を大宗家」とあおぐ「古神道の精神」にあるとした。日本民族にそなわる膨張欲が、「古神道の精神」と結びついたとき、それは「玄妙なる力の宗教」「征服の宗教」「支配を求むるの宗教」「人類の生物的本能を霊化せる宗教」「色心を以て三世に徹し人天を包括すと信ずる宗教」[16]となり、異文明の積極的同化を推し進める精神的原動力になるという。こうした論理から後藤は皇室国家に同一化する国民の民族的自覚をうながすのである。

他方で後藤は、「古神道の精神」を胸に、政治的、経済的、文化的膨張を絶えずこころざし海外に勇躍する人材を輩出するために、「産業の隆盛、社会政策の完備、教育の普及、各種研究の発達」といった「所謂内面的充実の方面に力を注がねばならない」[17]とする。

なかでもそこで重んじられるべきは、「一も人、二も人、三も人」であり、それは「教育および学術的活動」の振興に俟つところが大きい。このことから、「我々は生きた学校教育、特に大学教育の方面において、純然たる研究事業の方面において、広くその優越性を東洋諸国に知らしめ、もって彼らをしてわが教育学術の力を借りるにあらざれば、到底

文化上の発達を計り、あるいは文明事業を経営すること能はずとの観念を植え付けねばならぬ。これ新植民地政策、すなわち日本文明策普及の上において最も重大なる事柄である」[18]と説く。後藤の対外的膨張主義から導かれた教育に対する過剰な期待は、「文装的武備」の方策としての「学俗接近」の論理へとつらなっていく。

後藤は、第一次大戦の戦況を見ながら著したと思われる「学俗接近の生活」(遺稿) の中で、次のように述べている[19]。

今次の世界戦は、或は知識の戦争と言われ、或は科学の戦争と呼ばれ、或は文化の戦争と唱えられている。それ程に其の戦争行為が知識、学術、又は文明の力によりて指導せられ、支配せられて居る。殊に独逸の優勢が、主としてその燦爛たる学術の力に俟つところ多きは、何人と雖も看取し居る事実ではないか。

併し独り戦争のみではない、政治に於ても、若し西洋が我が国より遥に勝れて居るとするならば、それは凡て其の発達せる知識と進歩せる学術とが、遺憾なく実際の上に活用せられて居る結果に外ならない。即ち予の所謂学俗一致又は学俗接近の理想が、充分に実現せられて居る結果に外ならない。

翻つて我が国の現状を観察するに、此の点に於て甚だ遺憾なきを得ない。大にしては政治、産業、教育等の問題より、小にしては家庭生活、個人生活の末に至るまで、凡てが因習旧套に依り、凡智、常識に基いて処理せられ、而して甚だ学理的進取改造の努力に乏しい。凡ての施政凡ての活動が、余りに非科学的、非組織的である。それにも係らず、学者は超然世外に高踏して実社会を念とせず、世俗は漫然巷塵の間に蠢動して、強いて学者の言に耳を掩い、前者は後者の知識を嘲り、後者は前者の迂闊を嗤い、斯くして両々互いに相反目し、相排攘して居るの観がある。かくては文化の独立などは勿論のこと、産業上の独立の如きも、容易に其の実現を望み得ないではないか。

後藤の見解は、20世紀に入り、いちじるしい深化と分化をなし、急速に進展していった近代科学、学問と国民生活の融和、結合を期そうとするもので、いわば西洋近代文明に方向づけられた国民大衆の知的、文化的な底上げを意図していた。このことから「学俗接近」は、為政者側からすれば、日本の帝国主義的膨張の基盤となる民力育成の方策を説くものであったが、後藤のいう「世俗」——すなわち国民大衆の立場からすれば、従来の生活経験からは得がたい科学知、学問知を獲得する機会をつくりだす可能性を示唆するものであった。両者の利害と思惑が一致するときに実践が生まれるが、のちに「大正デモクラシー」と呼ばれる時代の社会的、文化的状況はその促進力となっていくのである。

2．通俗大学会と新渡戸稲造

（1）通俗大学会の組織と事業

後藤新平が、自説である「学俗接近」を実践するべく通俗大学会を組織したのは、1914、15年のことと推察される。総裁には後藤が、会長には新渡戸稲造が就任した。事務所は東京市神田区猿楽町10番地に置かれた。通俗大学会の構成とその活動については未詳な部分が多く、その実態について明らかにできないが、同会より刊行された「通俗大学文庫」の巻末に付された会員規約には次のような記述がある。

第一　本会ノ目的ハ広キ意義ニ於ケル国民教育ノ一助タランコトヲ期シ、古今東西ニ渉ル諸科ノ知識ヲ最モ容易ニ社会ノ各階級ニ普及セシメ併セテ世界的時事問題二関スル論評ヲ紹介セントスルニアリ

第二　本会ハ前項ノ目的ヲ達センガ為メ各専門家ノ執筆ヲ請ヒ「通俗大学文庫」ト題スル冊子ヲ毎月刊行ス

（一)「通俗大学文庫」ハ現代人ニ必須ナル智識ノ紹介説述ニ努メソノ標準ハスベテ現代人ノ生活ニ於テス

（二)「通俗大学文庫」ハ平易簡明ヲ旨トシ専ラ内容ノ充実ヲ重ンジ而モ極メテ廉価ヲ以テ広ク世間ニ頒タントス

□ポケット型、二百頁内外、総鳥之子装釘、定価各冊金三十銭、送料金四銭

第三　本会ハ「通俗大学文庫」ノ副産物トシテ世界的時事問題ニ関スル論評ヲ紹介センガ為メ「東西時論」ト題スル叢書ヲ随時刊行ス

□ポケット型、百頁内外、仮装釘、定価各冊金十銭、送料金二銭

第四　本会ノ趣旨ヲ賛シ「通俗大学文庫」ヲ引キ続キ購読スルコトヲ約シソノ六冊分ニ対スル割引代金一円七十銭（郵券代用一割増）ヲ前納セラルル人ヲ本会会員トス、但シ会員ニ送本スル郵税ハ本会ノ負担トシ発刊ゴトニ即日配本ス

（一）会員ハ予約以外ノ本会出版物ヲ随時購入セラルル場合直接本会ニ注文セラルルモノニ限リ特ニ郵税ハ本会ニ於テ負担ス

（二）本会会員ハ随時本会主催ノ講演会ニ出席セラルルコトヲ得

第五　多数ノ会員ヲ有スル地方ノ有志ニシテ講演会ヲ催サントシ本会亦ソノ必要ヲ認メタル場合ニハソノ地方二於テ講演会ヲ開催スルコトアルヘシ

ここで注目されるのはその価格である。各巻わずかに30銭というのは、当時の学術書としては破格の値段であった。岩波書店がドイツのレクラム文庫を模し岩波文庫を発刊したのが1927年７月であり、星ひとつの定価が20銭であったことを考えれば、通俗大学文庫は

それに先んじる試みであったといえよう[20]。通俗大学文庫の発刊にあたっては後藤が私費を投じた[21]。

「通俗大学文庫」の題目は、後藤と新渡戸が選定し、執筆を依頼した。初期に刊行された書目を示すと以下のとおりとなる。

第一編　阪谷　芳郎著　最近の東京市
第二編　大隈　重信著　国民教育論
第三編　後藤　新平著　日本膨張論
第四編　建部　遯吾著　都市生活と村落生活
第五編　松岡　均平著　日本の植民的発展
第六編　後藤朝太郎著　文字の起源
第七編　上田　萬年著　国語学の十講
第八編　高野岩三郎著　本邦人口の現在及将来
第九編　三並　　良著　オイケンと時代思想
第十編　稲垣　乙丙著　日本の天恵
第十一編　石本　恵吉著　鉄と石炭

後藤の著作とともに阪谷芳郎、大隈重信、松岡均平といった後藤と親しい関係にあった人物の名がそこにあった。ほかに帝国大学系の学者が名をつらねた。

「通俗大学文庫」の購読者はそのまま会員としての資格を付与され、同会が主催する講演会に出席できるという特典があたえられた。また多数の会員を有する地方において有志によるはたらきかけがあった場合、その地で講演会を開催することとした。近代郵便の原則である国内均一料金の制度を利用したこのシステムは逓信大臣であった後藤ならではのユニークな試みであった。「学俗接近」の実践を展開していくうえで、後藤がねらいとしたのは中央と地方の間に存する文化的懸隔の解消であった。通俗大学会は、通俗的学術書の普及を図りつつ、その購買層を会員として特定し、かれらを媒介にして中央と地方をつなぐ装置を用意しようとしたのである。

(2) 新渡戸稲造の役割

新渡戸稲造は、後藤が「学俗接近」の実践を推し進めていくうえでのよきパートナーであった。新渡戸と後藤は、台湾総督府の職にあったときから昵懇の間柄であった。1901年、新渡戸は総督府民政長官であった後藤から熱心な招請を受けて総督府技師となる。彼は民政部殖産課長、殖産局長心得、臨時台湾糖務局長と栄進を重ねながら、台湾における糖業経営の基礎を築くのに尽力した。台湾総督府での任を終えた新渡戸は、1903年に後藤の推

轢により京都帝国大学法科大学教授に着任する。のちに同学より法学博士の学位を授与されているが、これも後藤の取り計らいによるものであった。以後、1906年に第一高等学校校長となり、1909年、東京帝国大学教授を兼任（1913年に第一高等学校長職を辞し専任となる）し、そこで後藤が中心となり児玉源太郎を記念して寄付した植民政策講座を担当している。後藤は、通俗大学会を軌道に乗せていくのに新渡戸の教育者としての才智と人脈を積極的に利用した。新渡戸もまた自覚的に取り組んだ。ただしそれは後藤からの求めに応じてというよりも、非エリート教育にも熱意をもっていた新渡戸個人の思惑と一致するものであり、その意味で新渡戸の姿勢は意欲的であった。

一高校長時代の教え子で戦後文部大臣となる森戸辰男[22]は、教育者としての新渡戸が社会教育の領野でも先駆的な仕事を成したことについて次のように述べている[23]。

> まづ第一には、先生が我国における組織的な社会教育運動の生成に貢献せられたことをあげねばならぬ。私は先生が後藤伯らと一緒に起された「通俗大学」の運動のことをいうてゐるのである。今日では成人教育講座とか大学拡張とかいふことは決して珍しいことではないのだが、当時に於てはかかる運動は極めて稀であり、知名の有力者をも含んだこの種の大規模な運動はこれが嚆矢ではないかと思ふ。この会は一方では、斯界の権威者による小冊子を低価で普及すると共に、他方ではまた軽井沢における夏期大学を始めて諸地方において大学普及の講演会を開いた。私も数度その講師を依頼されたことがあった。しかしこの大学普及運動はその適切なる狙ひ処にも拘らず、それ自身としては予期の効果を収めえず間もなく中絶して了った。尤も、それはその後に盛んになった夏期大学運動、成人教育運動、低価且有権的な小冊子出版に刺戟と模範を与へた点において蔽ひがたい功績を残したのではあるが。

つづけて、「通俗大学運動は恐らく先生の示唆に負ふところの運動であったとはいへ、先生自身の通俗教育家としての活動は、それに吸収されて了ひはしなかった」[24]と述べ、一高校長、東大教授であった時に、『実業之日本』、『婦人倶楽部』等の通俗雑誌で精力的に執筆活動を行い、市井にある読者を啓蒙した点に社会教育家としての功業を認めている。新渡戸は、大衆向けの雑誌に執筆するのに、「車挽く人、柴刈る野の人」[25]にも理解できるようにと庶民にも親しみやすく平明な文章をこころがけた。大学教授が通俗雑誌に寄稿することへの批判もあったが、新渡戸は意に介さなかった。

新渡戸もまた「学俗接近」を説いた。「東京毎日新聞」(1909年11月6日）の論壇に発表した「学俗接近の急務」[26]と題する小文においてである。すなわち、日本の教育上の最大欠陥は、学校以外に世人を教育する道なきことにある。毎年各地で行われる講習会なども、講師の依託、派遣の都合もあり多くは都会にあって地方に散在することは少ない。同業組

合、都市、各府県はそれぞれに講師の招聘に努めるべきである。学者もまた世俗に迂遠なるをもって尊しとせず、俗流に棹さし世事に親しみ、自家の主張を貫徹して学徳を発揮すべきである。つまるところ世間というのは相持ちのみ、賢愚の別なく君子も小人もひとしく手を連ねて行くほかにない。学者と俗人の関係も同じであって、その理を会得して具体的な事業をなし、学俗の接近を図ることは、ただ教育上の問題だけにとどまらずに一国の殖産上に関係することがはなはだ大きい、と論じている。後藤の所論とほぼ主旨を同じくする主張であり、通俗大学会への関与が新渡戸個人の発意によるものであったことが理解される。

通俗大学会の実務的な運営を担ったのは、新渡戸の弟子たちであった。なかでも、前田多門（1884-1962）と鶴見祐輔（1885-1973）の二人は、ともに一高時代から親友の間柄で、官界入りしてから後藤に重用された。

前田は、大阪出身で、一高をへて東大法科を卒業後、内務省入りし、本省文書課長、内務大臣秘書官、都市計画課長等を歴任した。後藤が東京市長に就任するや内務省から引き抜かれ、助役となり市政を支えることになる。東大在学中、新渡戸に傾倒し続けた前田は、「自分は、他に何の職業も求めず、一生、先生の助手として、働きもし指導もして頂こう」と、「義勇志願兵的の助手」とならんことを「生活方針」としていたが、父親の事業が傾いたため、その計画も立ち行かなくなった。そこで新渡戸に就職方針について相談に行ったところ、「日本に欠けているものは社会教育である。君は、社会教育家になれ。しかし、その準備として、一時、官界に入り給へ。現在の日本では、何と言っても、官界は、社会の展望に最も便利の地位である。それには、内務省が良からう」[27]との「御託宣」があり、内務官僚になったという。前田は内務省官吏であった1918年から翌年にかけて、後藤が省内に創設した制度である海外出張を命じられ、アメリカとヨーロッパを巡遊し、社会事業や社会教育を中心に視察している。1917年、通俗大学会の活動より生起した信濃木崎夏期大学の開設に向けて財団法人信濃通俗大学会が発足したときには評議員となっている。

鶴見祐輔は、岡山出身で、一高をへて東大法科を卒業後、内閣拓殖局を経て鉄道院に勤務する。この時、鉄道院総裁であった後藤に認められ、新渡戸の仲介で後藤の娘愛子と結婚している。鶴見も信濃通俗大学会の評議員となったほか、夏期大学の講師をつとめた。「大学時代の4年間、精神的の光として、悩み多き青春の道を照らして下さった」[28]新渡戸のそばを片時も離れなかった鶴見は、私生活においても新渡戸家とつきあいを深くした。英語の堪能な鶴見は、アメリカ人である新渡戸の妻メアリーとも親しくなった。晩年、病に倒れ、口を利けず、からだを動かすことのできない身となりながら、逡巡をかさね、その末に新渡戸の信仰であるクエーカーに改宗したという娘和子の語る逸話[29]は、青年期の新渡戸による感化が、彼の生涯をつらぬいたことを伝えている。鶴見もまた東京市長時代に後藤の仕事をたすけ、都市政策の調査研究機関である東京市政調査会の設立時にはその

準備、運営の任にあたったほか、チャールズ・A・ビアードを東京市に招聘するなどして、東京市政研究の基礎を築いた。

前田、鶴見のほかに、通俗大学会の事務局を構成した人物に、川西実三・金井清・那須皓・小平権一らがいた。いずれも新渡戸の一高校長時代に薫陶を受け、東京帝大を卒業後、大学院に進んだ那須をのぞけば、金井は鉄道院、川西は内務省、小平は農商務省とそれぞれ官界入りした（小平はのちに通俗大学会の理事長を務めている)。彼らは、当時まだ20、30代の少壮官僚であったが、職務柄、地方の事情に明るく、個人的にも各地の有力人士とコネクションを有しており、学術文化の地方への波及という仕事に携わるのにまさに適任であった。また時に彼らはみずからも講師となり、講演、講義の壇上にあがることもあった[30]。

新渡戸は、明治末期、日本の学歴エリートの中心であった一高の校長となり、そこで西欧の文芸、哲学思想の豊潤な学殖を傾けつつ個人の人格修養を重んじる教育を行うことで、従来の勤倹尚武に染まる気質と校風をあらため、西洋文化を意欲的に摂取しすすんでその内面化を図ろうと志す学生集団をつくりだした。これがいわゆる一高の“教養主義”となって同校の文化と伝統を形づくることになる。また一方で、通俗雑誌の執筆を通して一般読者に、人類の知恵と、同時代の日本人の世間知を集約し、平易でなじみやすい言葉で修養をすすめ、実際的生活場面での応用を説く“世俗的修養”をもって啓蒙しようとした。ただし、その説くところは処世に傾いた立身出世主義とは異なり、個人の人格の完成を期そうとするものであった。両者は新渡戸個人においては人格主義という本質において同一であり、それらは対象に合わせてたくみに弁じ分けられるに過ぎなかった。彼は、教育という営みを論じる際に、個人における主体的、内発的動機を重く見た[31]。そして個人にとって最良の利益は国家社会にとっても最良の利益となると信じていた[32]。この点、個人をあくまでも没主体的な人材ととらえ、国益を本位とした単眼的発想からしか教育に関心を向けなかった後藤とは違っていた。

新渡戸は後藤とともに通俗大学事業の一環として夏期大学を起こし、その実践のなかで高等教育レベルの学問を教養主義というフィルターを通して非エリート層にも広く伝播しようとした。新渡戸が一高校長時代に育てたエリート官僚たちはそのミッショナリーとなった。彼らは、新渡戸の思想をみずからの生活にあてはめ、またそれを実行してきただけに、その趣意をよく理解したうえで行動することができた。このことからも通俗大学会にあって新渡戸の関与がなければ、夏期大学における教養主義という方向性は示されなかったことは確かである。

3．軽井沢夏期大学における「学俗接近」の実践

通俗大学会が手がけた活動でもっとも成果を挙げたのは、長野県下を中心に実施された

夏期大学であった。この夏期大学は、長野県下の木崎湖畔（北安曇郡平村)、軽井沢、戸隠・野尻[33]の他、兵庫県の淡路島[34]でも実施された。

このうち、1917年に開講した信濃木崎夏期大学は、わが国で初めての本格的な大学拡張事業と呼べるもので、1920年代に植民地をふくめ全国各地で地方教育会等により開設されていく夏期大学運動の嚆矢をなした。筆者は信濃木崎夏期大学についてはすでに別稿で論じているので詳述はさけるが、後藤のはたらきかけに在京の信州財界人が呼応し、開講の前年に財団法人信濃通俗大学会が設立される。法人の理事には同郷の沢柳政太郎（成城小学校校長）・伊藤長七（東京高等師範学校附属中学校教諭）・加藤正治（枢密顧問官）が就任した。後藤、新渡戸、前田、鶴見ら通俗大学会関係者は評議員となった。信濃木崎夏期大学の活動方針はこの信濃通俗大学会が定め、実務上の運営は、北安曇教育会をはじめとする地元の教育関係者に委ねられた。このように信州人脈を背景に安定した基盤が得られたことから、信濃通俗大学会は、通俗大学会とは別個の独立した組織として扱われることになる[35]。信濃木崎夏期大学は戦前・戦中・戦後と途絶することなく、郷土社会に根ざした実践を今日にいたるまで続けている。

軽井沢夏期大学は、1918年の第１回開講以来、1934年の第16回まで続けられた。聴講生は、北海道から沖縄、植民地朝鮮、満洲にまでわたり、最盛時にその数は470名にまでおよんだ。戦時中は中断を余儀なくしたが、1929年、地元出身の有志によって再発足を見、戦後の軽井沢町の地域文化振興の中心的役割を期待され、以後、毎年開講し今日にいたっている。戸隠・野尻の夏期大学が1921年の開講からわずか３年で途絶え、長野県外に開設を試みた他の夏期大学も見るべき実績を挙げなかったことから、通俗大学会の独自の事業としてはもっとも成功したケースといえる。ここでは通俗大学会が開設した軽井沢夏期大学の実践を紹介しながら[36]、社会教育上の意義について考えていきたい。

第一に指摘しうることは、全国から聴講生を集めることで、地方にあって地方へ向けた教育機会普及の装置をつくりだした点である。通俗大学会の創始した夏期大学の実践が先行するモデルとなり、また刺激となってその後の各地での夏期大学の開設をうながしたことは想像に難くない。むろん資産家を中心とした都市居住者の避暑地、別荘地であった軽井沢特有の階層構成をも考慮しなければならないが、それを可能とした条件の一つにまず挙げられるのは、寄宿舎付の講堂の設置である。木崎夏期大学では、開講に合わせて実業家からの寄付行為により講堂施設を建設したが、軽井沢夏期大学でも別荘地開発を進めていた野沢組の野沢源次郎が、後藤に説き伏せられ、土地一万坪を提供し、くわえて当時「アメリカ屋建築」といわれた洋式の講堂と寄宿舎４棟を新築して寄付した。寄宿舎はその後２年の間に３棟を建て増し、120名が収容できるようになった。それでも宿泊利用者の数に応じきれない場合は、北海道、東北、九州、四国の聴講生を優先的に収容した。寄宿舎付の講堂を設けたことは、遠方からの聴講者の参加を可能ならしめ、またその者たちの継

続的参加をうながすのに利するところが大きかった。また、木崎と同様、鉄道利用者に割引証を発行し、遠方からの聴講生に配慮した。これも鉄道院総裁であった後藤の取り計らいによるものであった。

つぎに内容面においては、官学アカデミズムに傾くきらいはあったにせよ、大正期のデモクラシー思潮を背景に、高名な講師陣による多彩な講義が展開されたことである。草創期の講義は以下のとおりである[37]。

大正７年　第１回

第１期　自７月２３日

　　至７月２９日　１週間

一　宗教生活と社会問題　　東京帝国大学文科大学教授　文学博士　姉崎　正治氏

一　吾国自今の経済政策　　慶應義塾大学教授　法学博士　堀江　帰一氏

一　最近科学の進歩　　明治専門学校教授　理学士　友田　鎮三氏

（興味ある種々の実験をなす）

第２期　自８月　１日

　　至８月１４日　２週間

一　英語　Emerson's Essay　　東京高等商業学校名誉教授　男爵　神田　乃武氏

一　英語　Carlyle's Sartor Resartus 講義其他

東京帝国大学法科大学教授　農学博士　法学博士　新渡戸稲造氏

一　英語研究法　　東京帝国大学文科大学教授　文学士　市川　三喜氏

右の外　日本人講師一名　西洋人講師二名交渉中

第３期　自８月１５日

　　至８月１４日　２週間

一　支那民族思想上の特徴　　東京帝国大学文科大学教授　文学博士　服部宇之吉氏

一　諸国の戦時食糧政策　　東京帝国大学農科大学教授　法学博士　矢作　栄蔵氏

一　法律に於ける責任観念の意義及発達

東京帝国大学法科大学教授　法学博士　鳩山　秀夫氏

一　社会政策　　東京帝国大学法科大学助教授　法学士　森戸　辰男氏

一　戦後の米国経済政策　　鉄道院参事　法学士　笠間　杲雄氏

一　現代の工場政策　　農商務省臨時雇業調査局事務官　法学士　河合栄治郎氏

右の外　講師一名交渉中

大正８年　第２回

　　自８月１１日

至8月23日　2週間

・デモクラシー　吉野　作造氏
・栄養の原理と食物の衛生　永井　　潜氏
・文化の哲学　桑木　厳翼氏
・欧米文明化の教育と本県の教育　沢柳政太郎氏
・歌舞伎劇の本質　小山内　薫氏
・新聞記事の心理的教育　小野　秀雄氏
・ホイットマン　有島　武郎氏
・来るべき芸術　有島　生馬氏
・個性の問題　紀平　正美氏
・近代劇と世界思潮　宮森慶大教授

此外課外として

・大隈重信　・加藤高明　・藤波言忠　・小野塚喜平次　・芳賀・青山・安井哲女史

自7月28日
至8月　9日　2週間

・エマーソン　男　爵　神田　乃武氏
・ハムレット　高商教授　浦口　文二氏
・英語　B・S・スミス

外　外人講師

軽井沢夏期大学は、例年、文化講座と英語講座の二つの柱でもって構成されていた。そのうち文化講座は、木崎夏期大学にくらべればバランスこそ欠いたものの、自然科学・社会科学・人文科学にわたる学際的な内容のものとなった。時事問題を扱った講義の多い点は同時期の木崎夏期大学とも共通する。英語講座は軽井沢夏期大学独自のもので、「西洋人講師」には、軽井沢に避暑滞在中の人士が招かれた。開講期間は、各年度により長短はあるものの、両講座とも1週間から長くは2週間以上にわたった。

講師について見てみると、新渡戸の影響が色濃く現れている。新渡戸の在職していた東京帝国大学現職の、ことに姉崎正治（宗教学者)、桑木厳翼（哲学者）といった新渡戸と親交があり、自由主義者として知られる教授の名がそこに認められる。さらに、森戸辰男、笠間杲雄、河合栄治郎といった一高校長時代の弟子たちが脇を固めるように名をつらねた。第2回以降においても、鶴見祐輔、岩永祐吉、那須皓、小平権一らが講師となった。

そして当時にあって論壇、文壇、芸術界で第一線の活躍をなした人物の名がある点も注目される。その例として、吉野作造「デモクラシー」(1919年)、劇作家の小山内薫「歌舞伎劇の本質」(同)、有島武郎「ホイットマン」、有島生馬「来るべき芸術」(同)、室伏高信「社会

問題」(1921年) らが挙げられる。異色なところでは、京都帝大教授の厨川白村「アイルランドの新劇」(1920年) がいた。民本主義を説く吉野作造のあとに、さらに急進的なデモクラシー論を主張した室伏高信が招かれているのも興味ぶかい。「白樺派」として知られる有島武郎は、新渡戸が札幌農学校教授であった時の教え子であり遠友夜学校の代表をつとめた。おなじく洋画家の有島生馬は実弟である。厨川白村は、日本社会に根をはる封建道徳の解体に向けて国民性の合理的改造を追求し、「恋愛至上主義」を説いた英文学者として話題の人物であった[38]。

また、新聞関係の講座が多くあるのも特色である。まず新聞学者の小野秀雄「新聞記事の心理的教育」(1919年) が目に留まるほか、1925年の第8回には、日本新聞協会が主軸になって朝日新聞が中心講師を送り、「夏期新聞大学」と銘打って講座を設け、軽井沢小学校に新聞展覧会を開催して、聴講生への啓蒙を試みている。そこでは、尾崎行雄「新聞記者としての失敗談」、岡実「社会勢力としての新聞紙変遷」、柳田国男「新聞と地方文化」などの講義がなされた (柳田はこのとき朝日新聞社の論説委員であり、新渡戸とは郷土会の活動で親交があった)。これについて、もともと後藤は、読売新聞の正力松太郎をふくめ、ジャーナリズムによる世論誘導という関心から新聞界とは深いつながりを有しており、それとの関連を無視できないが、夏期大学の聴講生がマスメディアにより学術文化に接近しうる社会的階層であったことを示唆するものといえる

軽井沢夏期大学に集まった聴講生は、教員および学生が多くを占めた[39]。それ以外には、官公吏、銀行会社員、自営業者といったいわゆる新中間層の人びとにより構成された。中等教育以上の学歴を有し、高等教育レベルの教養学習を可能とするだけのレディネスと経済的ゆとりを有するインテリもしくは亜インテリに限られた。こうした知的大衆による教養学習への希求は、個人における文化生活の成熟がもたらしたものであった[40]。

軽井沢夏期大学の成功は新渡戸の存在に負うところが大きかった。新渡戸の別荘が軽井沢にあったことも、事業を支える物理的条件となった。通俗大学関係者をふくめた新渡戸の弟子たち、および講師として招かれた各界の知友が、そこに滞在利用したことは想像に難くない。したがって新渡戸が死去した1933年を最後に、軽井沢夏期大学が実質的に終止したのは偶然ではない。「満州事変」以降の緊迫した世界情勢にあって、国際的観光地、有閑階級の避暑休養地であった軽井沢は、軍部の監視と干渉が集中するところとなり、夏期大学施設も、1934年以降は、早稲田大学の夏季軍事訓練場として使用されることになる[41]。1931年の夏期大学講師陣のなかに陸軍参謀本部東条英機の名があるのは象徴的であった。大正という短くも印象的な時代の終焉とともに、後藤と新渡戸は世を去り、またそれと同じくして、「学俗接近」の実践の舞台であった軽井沢夏期大学も幕を閉じたのである。

おわりに

後藤新平は、「学俗接近」を標榜し、大学教育のデタッチメントからアタッチメントへの転回を説き、またそれを社会教育という領野において実践した。

後藤の生前の出来事である。岩手県出身の学生で、東京に遊学している者の団体に在京岩手学生会なるものがあった。彼らのうち、日本大学の学生が、当時内務省にあった田子一民をたずね、在京の岩手県出身の学生をもって一団をなし、夏季休業を利用して、岩手県下で学術講演会を試みたい、相当な費用もかかるがその一部を適切な方面から寄付を仰ぎたいと相談をした。田子は、それには後藤さんに願うのも一策である、とのことで、みずから願い出たところ、後藤はこの要請にこころよく応じ資金協力を行った。後藤が一石を投じたことで、学生巡回講演は軌道に乗り、活動は継続した。1923年、在京岩手学生会が、岩手会から独立して初めての発会式を挙行しようとした際、ふたたび学生が田子を訪ね、後藤に出席を願ってほしいと頼ってきた。式の前日にである。このとき後藤は、日ソ関係改善に向けて労農政府の極東代表であるヨッフェを日本に招じ、交渉を図るという重要な外交局面に立たされていた。あまりにも多忙でしかも緊迫した状況に身を置く後藤に、田子は恐縮した態度で面会し用件を申し述べた。すると後藤は、「ヨフヘ氏の事も大事だが青年学生はより大事だ是非行つてやらう」と答えて、多忙ながらも発会式に約束どおりに臨席し祝辞を述べた。彼の政治的立場と地位を考えてみた場合、常識をはずれた行動ともとれるが、後藤の「学俗接近」に傾けた思いの深さを物語る晩年の逸話がある[42)]。

東北出身者である後藤は、地方と呼ばれる文化的僻遠の地に暮らす者が、西洋文明がもたらした学問と技術を学び、それをもって身を立て世に出て行くことの困難さをわが身をとおして知っていた。後藤自身、福島にある須賀川医学校で「変則医学」を修めただけで、帝国大学を出て官僚の道を歩んだ学歴エリートとは異なった出世の仕方をした。後藤は独学で学問を身に付け、それを社会生活の糧とした。後藤はテクノクラートの先駆け的位置にある官僚政治家であったが、藩閥を背景とせず、学閥に依拠することなく権力の中枢に君臨していくのに、学問は人生を切り拓く手段となった。「学俗接近」の思想と実践をもたらした後藤のオプティミスティックともいえる近代文明への信奉は、彼自身の出自と来歴に根があった。

後藤が、「学俗接近」を高唱し、世に問うたのは、すでに述べたように、第一次大戦後の国家経営策の指針とみなした欧米列強に比肩しうるだけの民力育成を図ることにねらいがあったわけだが、そこには「紳士税」という発想が抱懐されていた。「紳士税」とは、「物質的生活に於て余りある者は、其の余りある物質的資源を以てして、社会に奉仕することである。又、精神生活に於て余りある者は、其の余りある精神的産物を以てして、社会に奉仕することである」と説明されるように、広義の有産者階級から無産者階級への物

質的もしくは精神(文化)的富の分与を意味していた。後藤はこの「物質的精神的紳士税」が社会に惜しげもなく払われるならば、「自治生活の総社会は、義務的観念、公共的精神、共同的意気の充ち満ちたる、平和にして気高き境地と化するであろう」[43]との展望を抱いていた。後藤は、夏期大学の講演の席でも、同事業が、職務上その仕事を本分とする官公吏以外に、講師をはじめとする各界からの「紳士税」によって成立したことを強調しており、精神的、文化的富の譲渡による階級融和の実現という意図が、「学俗接近」実践の思想的後背にあったことが理解される。

そうしたことから、後藤にとって社会教育事業は、利益誘導型の大衆統合の文化的装置であったといえる。ただし教育をもってはたらきかけていく場合に、国民大衆が、個人のレベルで何を利として求め、何を価値とするかといった事柄について後藤は認識と経験を欠いていた。その点が、教育家であっても教育者ではなかった後藤の弱点であり、限界でもあった。社会教育会にあって蔵原惟郭に、のちに、みずから起こした通俗大学会で、新渡戸稲造に期待したのは、そうした具体的な教育内容と方法にかかわる才智であり、識見であった。後者についていえば、新渡戸というパートナーがなければ、通俗大学会は、社会教育会と同様、見るべき実績を挙げぬまま、終息したことは確かであろう。そうしたことからも、「学俗接近」の実践において新渡戸は後藤をおぎなう役割にあったのである。

最後に、後藤は、社会教育といういとなみを、物質的関係に抽象化してとらえ、それを人と情報の伝播と流通であると把握していた。こうした発想から夏期大学の実践において、大学拡張と鉄道および郵便制度が技術的に結び付けられ、社会教育の可能性を新しく示した。彼が最晩年に手がけたラジオ放送教育事業は、その象徴といえるものであった。筆者はこの観点からも、後藤が日本の社会教育に刻印した現代的性格について論じてみたいと考えている。別稿を期したい。

(注)

1)信夫清三郎『後藤新平——科学的政治家の生涯』博文館、1941年、5頁。

2)小川利夫「大正デモクラシーと社会教育」同編『講座現代社会教育Ⅱ　日本社会教育発達史』亜紀書房、1980年、121頁。また、小川は「現代社会教育思想の生成－日本社会教育思想史序説」(同『講座現代社会教育Ⅱ　現代社会教育の理論』1977年)において、後藤をふくむ官民にわたる大正デモクラシー期における社会教育の言説を、縦横にかつ丹念に整理し、その思想的系譜を見事に構図化している。そこで小川は、①社会政策的あるいは、社会事業的社会教育論、②官僚的社会教育行政論、③翻訳的社会教育論ないし成人教育論、④これら行政的社会教育論とは対象をなした農民・労働者の自己教育運動の立場より生起された社会教育批判論の現出に、現代的契機を認めている。彼によれば、後藤の社会教育論は、社会政策的あるいは、社会事業的社会教育論につらなる「教化事業的社会事業論」と位置づけられる。ただし、小川の所論における後藤の

把握は、後藤の社会教育思想の片面を指摘したにすぎず、その振り幅と内実をトータルかつアクチュアルにとらえているとはいえない。小川のように言説のみに依拠して思想をかたどろうとするアプローチでは、観念論的なレベルでの理解にとどまるという限界が生じる。筆者と小川の社会教育の現代化に対する認識は異なるが、むしろ、後藤についていえば、同論考のなかで小川が問題とした「科学の大衆化と普及化」という視点から、論じられるべきであったろう。

3）拙稿「大正デモクラシー期後藤新平の社会教育思想」『日本社会教育学会紀要』No.27、1991年。同「評伝『国民啓蒙家』後藤新平①～⑳」『月刊東京』1993年2月～94年10月。

4）研究書に限れば、宮坂広作『近代日本社会教育史研究』法政大学出版会、1968年、藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』学苑社、1979年、が目に留まる程度であろうか。宮坂は、「思想善導的・民衆教化的な目的と性格」をもつ「官製講座」の例として、信濃木崎夏期大学を挙げている。他方藤田は、宮坂とは対照的に1920年代の自己教育運動の動向において信濃木崎夏期大学を位置づけており、戦時下にあってもアカデミック・フリーダムの精神を貫き通した点を評価している。両者の認識はあまりにも隔っている。比較的最近のものでは、拙稿「信濃木崎夏期大学の思想と社会的基盤」日本社会教育学会編『高等教育と生涯学習』日本の社会教育第42集、東洋館出版社、1998年、大串隆吉『日本社会教育史と生涯学習』エイデル研究所、1998年、手打明敏「信濃木崎夏期大学創設と教育改革論」『筑波大学教育学系 教育学系論集』第25巻第2号、2001年、がある。大串と手打の研究は、筆者に対する批判を含んでいる。

5)『新時代』第2巻第3号、1907年3月、13－15頁。

6）蔵原惟郭(くらはらしこう)は、熊本県出身、熊本洋学校に学び海老名弾正、徳富蘇峰、浮田和民らと同じ熊本バンドに所属したキリスト者である。1876年、同志社英学校の新島襄に師事し、その後、1884年にアメリカ、1890年にイギリスに渡り苦学しながら哲学、社会学などを研究する。帰国してからは熊本英学校・女学校、岐阜中学校などの校長職を歴任。1897年に上京、東京美術学校、早稲田大学、慶応大学などで教育学を講じるかたわら帝国教育会主幹となり、全国巡回講演、図書館の普及に尽力する。1900年、政友会創立に参加するが、ほどなく政党を去る。日露戦後は政界革新運動に関与し、1908年に衆議院選挙に当選してからは院内最左派の論客として普選運動、国定教科書反対、シーメンス事件などで活躍した。

7）櫻井良樹「日露戦後の蔵原惟郭と社会教育会」『麗沢大学論叢』第2巻、1991年1月、3－4頁。なお筆者は、同論考から、蔵原惟郭と社会教育会の関係、およびその機関誌である『新時代』について多くの教唆を得ている。

8)「社会教育会宣言及会則」前掲6）書、第2巻第2号、1907年2月、75頁。

9）同前書、6頁。

10）たとえば東京市では、市の教育会の主催による講談会が1901年頃から行われていたが、当初はその対象が教員という特定の知識層に限られ、大衆性をもつ通俗教育のための講談会ではなく、むしろ教育問題についての講談会という性格が強かった。東京市教育会が、細民居住地帯の住民

をふくむ広範な市民を対象にした通俗教育に取り組むのは、日露戦後の1909年以降であるという（山本恒夫「東京市教育会主催『通俗講談会』の展開過程」『淑徳大学研究紀要』第4号、1970年、参照)。

11) 前掲7）書、6頁。

12) 鶴見祐輔『後藤新平』第2巻、勁草書房（復刻版)、1965年、816頁。

13) 本稿での引用は、後藤新平著・中村哲編『日本植民政策一般／日本膨張論』日本評論社、1944年。その146頁。

14) 同前書、207頁。

15) 同前書、181頁。

16) 同前書、231頁。

17) 同前書、209頁。

18) 同前書、239頁。

19) 水沢市立後藤新平記念館編「後藤新平文書」24－10「自筆原稿類」、拙稿「資料紹介　後藤新平著『学俗接近の生活』」『暁星論叢』第48号、新潟中央短期大学、2001年6月、53頁。

20) この点に関わって文芸評論家の奥野建男は、「岩波文庫」発刊の画期性について以下のように述懐している。「戦前は、日本においては本はやたらに高価であった。省線（国電）の初乗り運賃が5銭であった昭和初年、学芸書は、3円とか5円とかの定価をつけていた。今日でいえば3万円とか5万円くらいだ。当時はエリートであった大学生たちも、学芸書を買うためには、食事を切り詰めなければならなかった。まして一般庶民には学芸書は無縁の高級品であった。文芸書は昭和初期のいわゆる円本（一冊一円）でいささか中流家庭にも普及した。しかし学芸書は……。」（『値段の明治大正昭和風俗史』下、朝日文庫、1987年、392頁)。

21) 川西実三『感銘録』社会保険新報社、1974年、67頁。

22) 森戸辰男は、一高時代、前田多門、鶴見祐輔らと同じく弁論部に所属した。当時、新渡戸の精神的感化を受けた学生の集った弁論部の雰囲気について次のように述懐している。「さて、私が弁論部に入ったのは、そこで政治的な弁論の技術や能力を養うためではなく、人間的な教養を高めるためでした。幸いに、一高の弁論部は、政治的傾向の強い早稲田大学などのそれとは違って、教養的な傾向が支配的で、外部から招聘する講師も、政治家よりも主として思想家や宗教家でした。練習会における雰囲気も、弁論の技術を練習することよりも、思想を交換し教養を高めることにあったようです。これには、弁論部の代表的な先輩ともいうべき前田・鶴見両氏の影響が特に多かったように思います。」(森戸辰男「鶴見祐輔さんと私の一高生活」北岡寿逸編『友情の人鶴見祐輔先生』1975年、21頁)。この指摘は、一高文化と通俗大学会の夏期大学事業に見られる教養主義の関係について考えてみた場合に示唆的である。

23) 森戸辰男「教育者としての新渡戸先生」『新渡戸稲造全集』(以下『全集』と略記）教文館、305－306頁。

24) 同前書、306頁。

25) 新渡戸稲造『修養』(1911年刊) の「序」、『全集』7巻、8頁。

26) 『全集』5巻、252－254頁。

27) 前田多門『山荘静思』羽田書店、1947年、155頁。

28) 鶴見祐輔「日米交換教授時代の新渡戸先生」『全集』別巻、206頁。

29) 鶴見和子「自分と意見のちがう子どもを育てた父親への感謝」前掲北岡書。

30) 川西実三の回想によると、「地方へ役人がもっと出て、そしてこの趣旨を拡げようということになって、小平君と私とが組になって、長野県へ行くことになった。ところが聞いてみると長野県は日本で最もインテリの多い県だ。あそこでは三宅雪嶺も冷やかされた。へたな演説をしたら大変なことになると、ビクビク行って諏訪の高台にある小学校で二人が演説をした。公衆の面前で始めて、私は小平君と演説をした。」(『小平権一と近代農政』日本評論社、1985年、88頁) とあり、新渡戸門下の官僚の奮闘ぶりがうかがわれよう。

31) 新渡戸は、『随想録』(1907) に収められた「教育の目的」と題する講演記録において、教育、学問の目的には、第一に職業のため、第二に道楽のため、第三に装飾のため、第四に真理のため、第五に人格を高尚にするため、とあるが、これらのうち第五、すなわち人格修養こそが最上の目的であるとした。そして、専門性を深めると同時に、一般の事物にも通暁しなければ、豊かな人間性を身につけ、人生を全うしたことにはならないと述べている。新渡戸が理想的人間としたのは、「あれは一寸学者見たやうな、百姓見たやうな、役人見たやうな、弁護士見たやうな、また商人見たやうな所もある」、「何だか訳の分らぬ奴」であった。すなわち、「先づ己れの修むべき所のものは充分に之れを修め、さうして誰とでも相応に談話が出来て、円満に人々と交際して行ける」人物をつくることであった(『全集』第5巻、227－230頁)。この講演録には、新渡戸の教育思想のエッセンスともいえる「専門センスよりコンモンセンス」、「ソシアス」を重んじる教育観が端的に示されている。。

32) 新渡戸稲造『自警』(1916年刊)、『全集』第7巻、576－577頁。

33)『長野県上水内郡誌　現代篇』1979年、1357－1361頁。

34) 第1回淡路夏季大学は、1923年8月21日～30日まで開催され、講師には軽井沢夏期大学の常連講師であった桑木厳翼、淡水生物学者の川村多実二ら8つの講義と後藤新平をはじめとする7つの科外講演が行われた(「通俗大学会第1回淡路夏季大学案内」前掲「後藤新平文書」24－16)。

35) なお、通俗大学会と信濃木崎夏期大学の関係について後藤は、生みの親である自分からすればそれぞれ「子」と「孫」にあたると述べている(「後藤新平文書」24－13)

36) 土屋長平「軽井沢夏期大学」『郷の華』第3集、1978年、『軽井沢夏期大学30周年記念誌』1978年、を参照。

37)『長野県教育史』第13巻史料編7、1983年、1066－1067頁。

38) ねずまさし『日本現代史』2、三一新書、1967年、157－161頁。

39) 開講二年目の軽井沢夏期大学の景況を、「信濃毎日新聞」(1919年7月29日付) は次のように伝えている。「(……) 昨年の同大学聴講生は、学生と教員と全然二階級に限られて其数も甚だ乏しかつた。処が本年は、東は宮城、青森、西は山口、熊本、鹿児島よりズツト支那朝鮮よりも集まり来りて、第一期、第二期を通ずると六百名に達する盛況で幹事も頗る面喰らつた。更に聴講生の身分職業別を見ると勿論教員と学生とが大部分を占めてゐるが、中に酒蔵家、商業家、銀行会社員、官吏などの階級を交へ更に農村青年や僧侶やもあり金光教何の某など云ふ振つた人も居る。更に猶、張、定、鉚、劉、祖、徴など呼ぶ支那学生も交り殊に大学の記録を破れるのは妙齢の婦人六十余名を聴講生名簿に登録されし一事である。大学講堂の付近にして針葉樹の空気清冷なるが中に第一第二の第三の寄宿舎が野沢組の寄付行為によりて新築され、軽井沢小学校の一部を第四寄宿舎と号し、都合四棟の無料寄宿舎がある。婦人聴講生は此中の最も立派な一棟を独占して得意で居つたが、食堂と風呂場は軽井沢小学校に設けられて、四個の寄宿舎生が食事の都度之へ集合する設計である。之が面白くないと云ふので、婦人食堂独立論が高唱され、婦人を此食堂より解放せよとの議論が湧いた。一面には又各寄宿舎の舎長を便宜上幹事が指名した処、男子側は普通選挙論を唱道して使命幹事の指揮を奉ぜぬと云ふ騒ぎにてデモクラシーの影響する処果しか無い。結局舎長は選挙に委し、食堂や風呂やは各舎に専属せしむべく野沢組に交渉が開始された。(……)」(前掲36) 書、1071頁)

40) 第1回の聴講料は、第一期 (1週間) 1円、第二期 (2週間) 1円50銭、第三期 (2週間1円50銭で、2期を兼修すると2円、3期を兼修すると2円50銭と定められていた。この時、英語講義と科外講義を3週間にわたり聴講した土屋栄一 (教員) によると、「授業料は弐円で当時の物価から見ると相当高いと思った」と述懐している。こうした例を挙げるまでもなく、夏期大学に参加できたのは、閑暇と経済的ゆとりを有するものに限られたことは容易に想像されよう (土屋前掲書、184頁)

41) 同前書、183頁。

42) 田子一民「後藤伯の思ひ出」新渡戸稲造『後藤新平伯を偲びて』岩手学生会、1929年、41−51頁。

43) 後藤新平「自治生活の新精神」仏教連合会編『第四回講習会講演集』192年1、24−25頁。